



ゆずっこ

福島市立御山小学校
学校だより No. 5
令和7年8月27日(水)
発行者 校長 高澤 里美

変わるチャンス!!

「子どもは、いつも今よりもっとよくなりたい、変わりたいと思っている」私は、この言葉を大切に、子どもと向き合ってきました。

新学期のスタートは、まさしくチャンス!!そんなことを考えていたときに、ある文章と出会いました。

『変わるチャンス到来』（一部抜粋）

学校に通っていると少なくとも3回の転換期のチャンスがある。4月、8月、1月である。休みが明け、学期のスタートを迎える。好機到来である。人は今よりも、もっとよくなりたい、やり直したいという思いを抱きながら生きている。特に、子どもたちにとっては、2学期スタートのこれからの時期が重要である。今までのこと、1学期のことがリセットされる。新しい自分、新たな目標、新しい取組など、心にしまっておいたこと、温めておいたことを実行に移すのである。何事もスタートダッシュあるのみである。

子どもでも大人でも、がんばっていると、なぜか応援してくれる人、助けてくれる人が目の前に現れる。すると、ますます努力することができる。そして、認めてもらえる。大きな自信を得ることができる。その自信は、さらに前に進もうとする自分の背中を力強く押してくれる。

子どものがんばりは、見ようとしなければ、見逃してしまうほどささやかであることも多いのです。2学期初日の職員会議で「小さな子どものがんばりを見逃さない目をもって、がんばっているその姿を応援してほしい」と教職員に話しました。

すると、スタート2日目の朝、教室の黒板に担任からのこんなメッセージが記されていました。

2学期、新たなスタート。言い方を変えれば「新たな自分に出会うチャンス」です。

もしかしたら、みなさんの中には「自分は～だから」「どうせできないから」「今まででもこうだったから～」というマイナスなイメージをもっている人がいるかもしれません。そんなふうに、自分で自分の可能性をつぶしてしまっているのなら、こんなにもったいないことはないです。先生は、みんなの新たな自分になるためのチャレンジを楽しみにしています!

朝、目を合わせてあいさつしてくれるようになった子どもがいます。教師が話すと、一緒に話し出していた子が黙って話を聴いています。トイレの床を真剣にブラシで磨く男の子がいます。「苦手なカボチャ食べたよ」夏野菜カレーの給食を残さず食べた子が報告してくれます。

どの子も、よくなりたいとがんばっています。

どんなにささやかながんばりでも見つけてあげられる、応援してあげられる、認めてあげられる、自信を与えてあげられる、そんな大人でありたいのです。

成長すること

発育測定 夏休みが終わって、久しぶりに子どもたちに会うと「背がのびたなあ」と感じます。高学年の子どもは、大人びた顔つきになっていて驚かされます。実際、成長に伴った身長・体重の増加はあるかを数字で把握するために、今週、発育測定が行われています。3.8cmも身長が伸びた子どもがいます。きっと、視界も変わっていることでしょう。少しずつ身長が伸びて、視界が広がっていくことは体の成長です。



自分で決める 2学期初めての給食は夏野菜のカレーとひじきのサラダです。子どもたちの様子を見に1年生の教室に行ってみました。すると、食缶の前に列が!!「おかわりしたい人がいっぱいだね」と担任に声をかけると、「いえ、自分が食べられる量に調整しているんです」と、思いもかけない答えが返ってきました。小学校での給食65回目の1年生が、これぐらいなら食べられるかも…と考えて、食べる量を自分で決める、これは、けっこう高度な技です。もちろん、自分で決

めた量だけれど食べられなかったり、足りなかったりすることもあるでしょう。でも、自分で自分のことを決められる力の高まりも、子どもの成長です。

とはいえ、給食を余すことなく、どの子にも同じ量を配膳し、自分にとって必要な1食分の量を知る機会とすることも給食の目的の一つです。もちろん、食べられなかったら無理に食べきる必要はありませんが、子どもにとって、給食は貴重な学びの場であることも忘れてはいけません。時々、きっちり配膳して確認する必要があることを担任は理解したうえで、子どもが食べられる量を自分で決める場を設けています。

(時に) 苦労は大事です 音楽室で行われている授業を参観しようと教室に入ると担任の一言が耳に入りました。「苦労は大事なんですよ」

なにかと子どもに苦勞させないようという配慮が優先される社会の雰囲気にあって、苦勞することの大切さを伝えようとしているこの言葉に妙に惹きつけられてしまいました。

簡単な曲の楽譜に、ドレミ…を書き入れます。先生が、ミソラソ♪と言ってあげて、そのとおりに書いていけば、たいした苦勞もなく終了できる活動です。でも、あえて、「わからないときは、教科書の○ページをみたり、この「ド」の音から数えたりすればわかるよ。教えてもらうのは簡単だけど、苦勞することも大事だからね」と、子どもたちが自力で書き終わるのを担任は待っています。最初は、四苦八苦している子どももたくさんいましたが、友達に聞く子、教科書のページを戻って確かめる子、「ミ」だけ、「ソ」だけ、というように同じ音の音符を書き入れていく子と、それぞれが方法を見だして活動を進めていきます。そのうち、あっという間に五線譜のドレミ…の位置を覚えてしまいます。



あきらめることなく苦勞したからこそ得られるものは、その結果がどうあれ、子どもの心を成長させます。子どもの目の前に出現した壁を難なく乗り越えられるように、すぐに階段を作ってあげるのではなく、子どもが自力で乗り越える方法を苦勞して考え、実行にうつすことができる力を育むことも、学校の大切な役割の一つです。何気ない授業の一コマも子どもの成長につながっていることを改めて実感したのでした。